



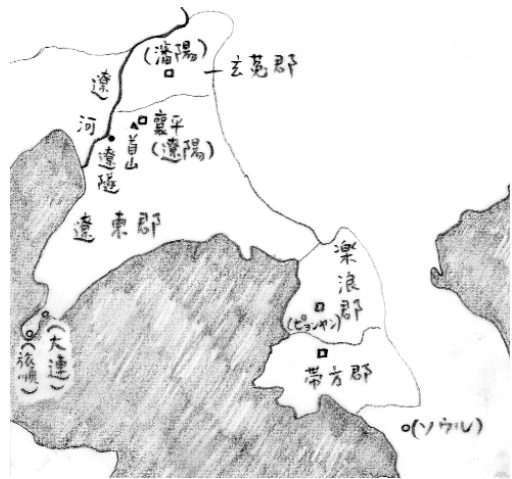
234年八月、諸葛孔明が五丈原の陣中で歿した。孔明の北伐を防ぎきった司馬仲達(司馬懿)はそのまま長安に留まり、蜀漢に対して睨みを利かせていたが、四年後、さらに箔をつけることになる。238年の遼東遠征の成功という勲功である。この遠征の主戦場が、666年後、今から101年前の日露戦争の三大会戦の一つである遼陽会戦の戦場と重なることに最近気がついた。これはたんなる偶然であろうか。それとも、何か理由があるのであろうか。

遼東遠征とは、後漢末の190年以来半世紀近く遼東・玄菟・楽浪・帯方の四郡、つまり、ほぼ現在の遼寧省の東半分と北朝鮮の西半分を実質的に領有していた軍閥の公孫氏を滅ぼさんがための遠征である。当時、四代目の公孫淵は、あるいは呉に誼みを通じるなど、魏に面従腹背の態度をとり、前年には明帝が差し向けた毌丘儉率いる魏軍を撃退し、燕王を自称するに至っていた。そこで仲達に白羽の矢が立ったのである。勝算がある仲達は明帝に、「往路が百日、攻撃が百日、復路が百日。休養に六十日を見込めば、一年で十分でございます」と大見得を切り、副将に経験豊かな毌丘儉、部将に気心が知れた牛金・胡遼を配し、歩兵・騎兵合わせて四万の軍勢を率いて都の洛陽を進発した。あわせて、別働隊が海路、楽浪・帯方向郡に向かった。238年正月のことである。同年六月、遼河の西岸に到達した。その東岸ではすでに公孫淵側が防備体制を整えて待ち構えていた。実は、前年に毌丘儉軍が撃退されたのがこの地、遼隧であった。そこで仲達は公孫淵の主力軍に対する正面攻撃を回避し、隠密裏に北上して渡河し、まっしぐらに、公孫淵が籠城していた襄平県城を目指した。出し抜かれたのに気づき、急ぎ返ってきた敵軍を、襄平城の西南8kmに盛り上がる小高い山塊である首山附近で撃破し、襄平城を包囲、同年八月、陥落させた。城を脱出した公孫淵はただちに斬られ、ここに「燕」は滅亡し、大庭脩氏の言を借りるならば、魏・呉・蜀・燕の「四国」時代が終わったのである。そして、その余祿として、邪馬台国の卑弥呼の使者が帯方郡を介して洛陽に赴く。戦後処理を終えた仲達は、翌年正月、都の洛陽に凱旋した。以上が遼東遠征のあらましである(拙著『西晋の武帝司馬炎』白帝社、1995年、金文京『三国志の世界』講談社、2005年参照)。

一方、1904年8月から9月にかけての遼陽会戦

は、遼陽に総司令部を置くクロパトキン大将指揮下のロシア軍22万に対して日本軍13万が攻勢を掛けた会戦である。日本側の戦死者だけでも5500人にのぼっており、激戦地の一つ首山堡では、のちに軍神と称えられることになる橘岡太中佐が戦死している(司馬遼太郎『坂の上の雲』の「遼陽」参照)。

公孫淵が居た襄平こそ、後年、クロパトキンが居た遼陽である。現在は遼寧省の遼陽市。秦漢時代、万里の長城の東端に位置する遼東郡、その郡治が置かれており(もっとも長城と襄平城は戦国時代に燕が築いていたが)、後漢末に遼東郡の太守に任じられた公孫度がこの地で自立した。公孫淵はこの公孫度の孫である。降って、唐朝が一時、安東都護府を置き、遼・金両王朝が五京の一つ東京遼陽府を置



き、明朝が東北経営の拠点とし、清朝でもヌルハチが一時都としたことがあるというように、中国史上、長きにわたって、漢民族・北方民族双方のフロンティアであり、かつ南流する遼河と華北から朝鮮半島方面に通ずる幹線路が交差する交通の要衝であった。もっとも、清代になり、東北地方の中心の座は、遼陽の北60kmの奉天、現在の瀋陽に譲ることになる。しかし、清末にロシアが敷設した東清鉄道のハルビンから大連・旅順への支線が、長春や奉天とともに遼陽も通ることになり、ロシアはここに操車場などを建設して新たに発展し、日露戦争が起こるやロシア軍の総司令部が置かれたのである。鷲淵一『奉天と遼陽』富山房、1940年参照。

冒頭の疑問に対する答えは至って平凡である。襄平、すなわち遼陽が東北地方随一の要衝であったからである。そして、東進した魏軍や北上した日本軍がこの地に拠る勢力に攻勢を掛けたのである。もっとも、胡漢の対立ではなく、遼東遠征が漢民族同士、遼陽会戦が外国軍同士の戦いという点では皮肉ではあるが。

ふくはら あきろう (教授・中国史)